

吉瀬美智子の秘密？

牧草 泉

吉瀬美智子は今をときめくファッションモデルである。最近第一子を出産した。彼女の人生は順風満帆の様子。それはそれで大変おめでたい。でも、彼女の顔を思い浮かべると、感謝の念が湧くと同時に時代は刻一刻と変化しつつあるんだということをひしひしと感じる。

実を言うと、最近まで彼女の名前も顔も知らなかった。つまり彼女がこの世に存在していることすら知らなかったのだ。半年ほど前だったか、偶然テレビで彼女を見た。そのとき彼女の顔相（顔形？）を見て、はっと思った。今までよく見てきた顔相だったのだ。「U嬢とそっくりじゃないか」。これが第一印象だった。

つまり、彼女の顔相は福岡中部の朝倉市近辺でありふれて見られるものだった。もしや、朝倉市界隈出身？ 一瞬そう思った。それこそアンビリバブルだ。というのは、今まで朝倉市近辺からもそれなりの知名人はでているが、あの顔相でファッション界での華やかなデビューはありえない。

の支店は閉鎖すると言っているんだって」と、私に教えてくれた。さらに、「ファッション関係の学校に行けば、いい線いきそうだね」とは向かいにあるカレー屋さんの女主人の評。でも、カレー屋さんから褒められてもU嬢としては素直には喜べない？

ある日、その洋品店近くに立ち寄ったついでに、彼女に吉瀬美智子のことを尋ねてみた。

「吉瀬美智子ってあなたにそっくりだよ。彼女の出身は朝倉市近辺じゃないの？」

「うん、そうよ、杷木町だよ」彼女は明快に答えた。これを聞いて、ファッション界でも例外はあるんだなと意外に思いながらも、わが意を得たりとすこく納得し満足した。どう見たって、あの顔相は絶対に朝倉市近辺でしか産しないのだ。

朝倉市近辺の女子生徒の顔が一樣に似ていることに気がついたのは、小学校時代である。長顔はほとんどいない。いかなれば、普通の顔を上下から少し押しつぶしたような感じの顔である。

極貧家庭の生まれで、遠出をすることは少なかったが、叔母に従兄弟たちと一緒に福岡に連れて行ってもらったことが何度かある。意識して周囲の人を観察したわけではないが、福岡市での「寸足らずの顔」に出くわした記憶はない。見落としを考慮しても、少なくとも福岡市には「寸

いことだった。

頭のなかで彼女を農家の娘風に着せ替えをした。モンペをはかせて、タオルで頬かむりさせて、田んぼの中に立たせた。田の草取りをさせた。麦も踏ませた。その構図はまさに彼女にぴったりだった。つまり、彼女は田んぼの中においてこそ一幅の絵になる女性？

でも、あの顔相で二十一世紀のファッション界をリードしているとは？ やはり弱小国日本も右傾化の非難を一身に受けながらも、世界とともに進化している？

U嬢は二十歳後半？ もちろん生粋の朝倉市近辺の出身である。彼女はある洋品店のT支店を一人で切り盛りしている。もちろん、あの吉瀬美智子がファッションモデルであれば、U嬢もファッションモデルに十分耐えうる顔相なのだ。

U嬢は客扱いが上手で近辺の人にも人気がある。また誰が見てもファッション感覚は抜群なのだ。彼女が休みを取ったときは本店からおじさん社員がやってきてピンチヒッターを務めているが、店は閑散としている。誰もお客が寄り付かない。それはそれは、可哀想なくらいである。これだけでも、いかにU嬢の存在が大きいかが理解できる。

隣の茶店の主人は、「あの店は、彼女で成り立っているのよ。彼女は誰にも誠実で親切だから、人気があるの。そのことは会社も認めているのよ。彼女が退社したときはこ

足らずの顔」は極力少なかったのだ。ということは、福岡市界隈の種族と朝倉市界隈の種族はルーツが異なる？

小学校時代に転入生が何人かいたが、彼女らはほとんど長顔で、短い顔でも朝倉市界隈の顔相とは違っていた。いわば他国者だった。この事実からも、朝倉市界隈の女性の顔はほぼ相似形だという思いをますます強くした。

中学時代に、ある友人にこの思いを話したことがある。友人は一瞬怪訝そうな顔をして、「それって、ほんとう？」と、そのときは、そう言っただけだった。ところが、三ヶ月ほどたったある日、彼がやってきて、「そういえば、お前の言っただこと、本当だね。今までそれとなく観察してみたんだ」と、納得顔で言った。これこそ百万の味方を得た思いだった。そうして今回の吉瀬美智子による立証。これって、一世を風靡した「日本語タミル語起源説」よりは、よほど信憑性が高いのでは？ こういう経緯もあって、福岡中部の朝倉市近辺には周囲とは異なる種族が？ 渡来したんだと次第に思うようになった。しかも五月雨的ではなく、一挙に、大集団でやってきたはずだ。そうして、

「騎馬民族征服説」的状況を思い浮かべたものだった。じゃあ、朝倉種族？ はどこから渡来したのか？ 朝鮮半島から？ 中国から？ 南を島嶼伝いに？ 思いは果てしなく広がっていく。誰かこの説を継承して、解明してもらいたいのだが、残念ながら、今のところ継承者はいない。